

大本山永平寺の二代目住職、孤雲懐^{こうんえじょう} 莽禅師は、道元禅師の弟子にあたります。

京都に生まれ、八歳で比叡山に上り、十八歳で得度して学問を学ぶ僧となりますが二十一歳の頃には山を下りて浄土教学を学び、やがて禅を学びます。

その後、建仁寺で中国から帰国していた道元禅師に出会い、問答をするとその聡明さに驚き、二歳年下にも拘わらず、道元禅師を師匠とし自分を弟子にと、願い出るのでした。弟子となった懐^{えじょう} 莽禅師は熱心に修行を重ね、やがて修行僧の筆頭となりました。

懐莽禅師の優れた功績の一つとして、長く道元禅師の侍者^{じしゃ}としておそばに仕え、約四年の間に師匠の言葉を聞き漏らさずに書きまとめ、後世に『正法眼蔵随聞記^{しょうぼうげんぞうずいもんき}』として読み継がれる著述を残されたことがあげられます。特に仏道修行を志す初心の者への心得が説かれ、道元禅師の教えを伝える、今日貴重な語録となっています。

それから数年後、道元禅師による『正法眼蔵^{しょうぼうげんぞう}』の著述が始まると、懐莽禅師はこれを整理し書き写します。この作業は京都の興聖^{こうしょうじ}寺から越前の吉峰^{きっぼうじ}寺、そして永平寺に修行の場を移しても続けました。

『正法眼蔵』「八大^{はちだいにんがく}人覚の巻」が書かれて後は、病氣療養の道元禅師に付き添い、京都へ同行します。間もなくして道元禅師は亡くなりますが、茶毘に付し、ご遺骨を携えて永平寺に戻ってから侍者としてのお勤めは続けました。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

永平寺に「承陽庵」^{じょうようあん}を設けてご遺骨をお祀りし、生きておられた時と同じ様に朝夕のご挨拶をはじめとして傍を離れずお仕えし、お位牌を守られたといわれています。このお勤めは現在に至るまで永平寺の修行僧たちに引き継がれています。

懷昇禅師はその後、当時としても長命の八十三歳まで道元禅師の著作を書き写し整理され、義介禅師^{ぎかい}に教えの道を引き継がれ、さらに当時十三歳の瑩山禅師^{けいざん}を最後の弟子として得度させました。

このご縁をもって、後に瑩山禅師は石川県羽咋の永光寺^{はくい ようこうじ ごろうほう}に五老峯という塚を作らせ後世に伝えることとなります。五老峯には如浄禅師^{にょじょう}から道元禅師、懷昇禅師、義介禅師、瑩山禅師の遺品を納めた塔が建てられていますが、その五人の禅師さまの教えの道筋の中にあって重要な役割を果たしているのが懷昇禅師です。

大本山永平寺の承陽殿にお参りする機会が有りましたら、あわせて能登半島、永光寺の奥にある、懷昇禅師ゆかりの五老峯まで足を延ばして訪ねてみては如何でしょうか。

— 終 —